

あなたへの「聖書メッセージ」 【天国と地獄】

● ルカの福音書 16章19節～31節

※ [新改訳聖書・使用]

今回は、“死後のことについて” 私たちは死んだらどうなるのか、ということについて、聖書から、しっかりと教えられたいと思います。

「人間には、一度死ぬことと、死後にさばきを受けることが定まっている。」と、聖書は明言しています。

私たちの肉体のいのちが、取り去られる時が、まちがいなくやってきます。それは、私たちが思っているほど、はるか先のことではないのかもしれませんが。

いのちのかぎを握っておられるのは、主イエス・キリストです。主イエス・キリストは、私たちにいのちを与え、そのいのちを支え、生かし、又、そのいのちを、最もよいと判断された時に、取り去られます。

主は与え、主は取られます。主の御名（みな）は、ほむべきかな。

私たちが、地上での生活がすべてであると思って、生活しているのだとしたら、それは的外れ（まとはずれ）です。肉体の死は避けられませんが、その先にあるものをしっかり見つめながら、毎日の生活をしていく知恵を与えられたいと思います。

「第一の死」といわれる肉体の死と、世の終わりに成就する復活までの間の、人間の状態について、聖書は、あまり多くのことを語っているわけではありません。

しかし、私たちは、死後のこと・死の先のことを、かいま見ることは出来ます。

まず、死の先のことに関係する、ことばの説明をしておきたいと思います。

出てくることばは、〈ハデス〉（よみ・とも訳されています。）、それに〈ゲヘナ〉、そして〈パラダイス〉 この3つのことばです。

まず、〈ハデス〉ですが、新約聖書では原文のまま、ギリシャ語の〈ハデス〉という言い方が使われていますが、旧約聖書では、原語の〈シェオル〉というヘブル語ではなく、〈よみ〉と訳されています。

新約聖書の〈ハデス〉と、旧約聖書の〈シェオル・よみ〉は同じもので、意味は（死者が終末のさばきを待つ間の、中間状態で置かれる所）ということです。

次に、〈ゲヘナ〉ですが、感じからいうと「地獄」ということでしょうが、日本人のもっている仏教思想からくる地獄観との混同をさけるために、あえて、「地獄」という訳し方はしないで、ギリシャ語の原語のまま、〈ゲヘナ〉という言い方をしています。

意味は、（神の究極のさばきにより、罪人が入れられる苦しみ場所）ということです。

〈ハデス〉や〈ゲヘナ〉と対照的なのが、〈パラダイス〉です。日本語に訳すと、（園・その）。「エデンの園」などの（園）ということですが、〈パラダイス〉の意味は、（天にあり、義人のたましいが、死後に移される所）ということです。

【使徒信条】に、「主イエス・キリストは、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）に下

り、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。
かしこより来りて、生ける者と死にたる者とを審き（さばき）たまわん。」とあります。

主イエス・キリストは、死んで葬られ、ハデスに下り、三日目にハデスの門を打ち破られ、死人の内よりよみがえり、天にのぼり、今は〈パラダイス〉におられるということになります。

そして、いつか、かしこより来りて再臨され、生ける者と死にたる者の「最後の審判」をされ、復活の体を与えて、ある人を新天新地である永遠の王国に招き入れ、ある人を「第二の死」といわれる〈ゲヘナ〉へ、生きたまま投げ込まれるのです。

〈ハデス〉〈ゲヘナ〉〈パラダイス〉の意味が、わかっていただけたでしょうか。

それでは、もう少し詳しく、聖書を見ていくことにしましょう。

● まず、神の前に義とされていない人たち、神を神として認めず、主イエス・キリストを救い主として信ぜず、神の前に罪人のままで、義とされていない人たちは、死後、どうなるのでしょうか。

ショッキングな光景が、旧約聖書の「民数記」という所に出てきます。

コラという人、ダタン、アビラムといった人たちが共謀して、250人の指導者たちと共に、はげしく神をあなどりました。

神は怒られ、審きを下されます。地面が割れて、その口を開き、コラ・ダタン・アビラムと、その家族、また彼らに属する者たちとを、ことごとくのみこみ、彼らは生きながら、〈ハデス・よみ〉に下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは滅び去ってしまいました。生きながら〈ハデス〉に下っていきました。

同じく、生きながらということでは、エノクやエリヤの場合もそうでした。

「エノクは、神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」

「エリヤとエリシャが、なお進みながら話していると、なんと一台の火の戦車と火の馬とが現れ、この二人の間を分け隔て、エリヤは、たつまきに乘って、天へ上って行った。」

エリヤは、天へ上って行きました。

コラたちは、生きながら〈ハデス〉に下っていきました。

エリヤやエノクは、〈天〉へ上って行きました。

正反対の方向へ、それぞれ向かっていきました。

死後、私たちが向かっていくのに、2つの方向があるのです。〈ハデス〉と〈天〉です。

主イエス・キリストは、数々の力あるわざを、いろいろな町々でなされましたが、悔い改めなかったカペナウムの町の人々に対して、こう言われました。

「カペナウム。どうしておまえが、天に上げられることがありえよう。ハデスに落とされるのだ。」

どうして、天に上げられることがありえよう。〈ハデス〉に落とされるのだ。——というのです。

ここでも、2つの方向が示されています。〈天〉と〈ハデス〉です。

この真理を、弟子たちに悟らせるために、主イエス・キリストは、こういう話をされました。

「ルカの福音書」16章19節～31節までのみことばです。

毎日、ぜいたくに遊び暮らしていた金持ちと、全身におできができ、貧しかったラザロという人がいました。

この二人が、肉体の生命を取り去られる時が来ました。さて、死後、この二人はどうなったんでしょうか。

金持ちは〈ハデス〉に、ラザロは、ハデスから、はるかかなたの〈アブラハムのふところ〉に連れて行かれました。

〈ハデス〉は、どんな所なのでしょう。

23節 「ハデスで苦しみながら」とあります。

24節 「指先を水に浸して、私の舌を冷やすように。私は、この炎の中で、苦しくてたまりません。」

25節 「今、おまえは苦しみもだえている。」

28節 「彼らまで、こんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。」とあります。

〈ハデス・よみ〉という所は、苦しくて、炎の中で苦しみもだえる、そういう苦しみのある場所です。

一方、ラザロがいる〈アブラハムのふところ〉といわれている場所では、ラザロは、慰めの中にありました。

そして、26節にあるように、この2つの場所の間には「大きな淵」があって、渡ろうとしても渡れませんし、越えて来ることにも出来ないのです。

金持ちは叫んでいます。

「お願いします。私の父の家に使いを送って、兄弟たちが、こんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせて下さい。」

しかし、答えはこうです。

「神のみことばである聖書の教えに、耳を傾けないのなら、たといだれかが、死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしません。」

神を信じない者には、神のみことばは、それが真理であるにもかかわらず、愚かな話にしか聞こえないのです。

〈ゲヘナ〉というのは、〈ハデス〉にいる人たちが、主イエス・キリストの再臨の時になされる「最後の審判」の結果、生きたまま「第二の死」として投げ入れられる場所、それがゲヘナですが、〈ゲヘナ〉についても見ておきましょう。

「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。おまえたちは、わたしが空腹であった時、食べる物をくれず、渴いていた時にも飲ませず、わたしが旅人であった時にも泊まらせず、裸であった時にも着る物をくれず、病気の時や牢にいた時にも訪ねてくれなかった。」

“永遠の火”とされています。永遠の刑罰の場所です。

「だれが、焼き尽くす火に耐えられよう。だれが、とこしえに燃える炉（ろ）に耐えられよう。」

“焼き尽くす火” “とこしえに燃える炉”とされています。〈ハデス〉で金持ちは経験した、舌を冷やすようにとたのんだ炎とは、比べものにならないようです。

「兄弟に向かって『ばか者』と言うような者は、燃えるゲヘナに投げこまれます。」

“燃えるゲヘナ”とされています。そういうゲヘナに投げ込まれたり、落とされたりするのです。

「ゲヘナの消えぬ火の中に、落ち込む、投げ入れられる」とも記されています。

火だけではありません。「そこでは、彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることが

ありません。」 うじが、体を食い続けるというのです。

「『いのちの書』に名の記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。」

「火と硫黄との燃える池」とも言われています。

「火と硫黄とで苦しめられる。」

「彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。昼も夜も休みを得ない。」

〈ゲヘナ〉の刑罰は、永遠の刑罰であり、「第二の死」といわれています。

そして、「最後の審判」の執行者であり、〈死とハデス〉の鍵を持っておられるのは、主イエス・キリストです。

「わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、〈死とハデス〉との鍵を持っている。」と言われます。

人間の、生まれたままの心は、〈地獄・ゲヘナやハデス〉の存在を信じることを好みません。人は、〈地獄・ゲヘナやハデス〉の存在を否定することはできますが、否定したからといって、実際存在しているものが、存在しなくなるわけではありません。

否定したからといって、神が存在するという事実が変わりがないのと同じです。

すべての人は、〈天国〉と〈地獄〉の二つのうちの、どちらかで、永遠にすごします。この両者は、あらゆる点において、全く異なっています。

● 次に、神の前に義とされた人たちは、死後どうなるのか、考えてみることにしましょう。

使徒パウロの願いは、「肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよい。」ということでした。

「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」

この時も、パウロは獄にとらえられていて、獄中からピリピの人たちに、手紙を書いているのですが、しかし、パウロには、地上での使命が残されていましたから、実際に、殉教して生命が取り去られたのは、先の話でした。

今すぐにでも、世を去って、主イエス・キリストと共にいたいというのは、私たちの願いでもあることでしょう。

生涯のほとんどを、罪人としての生活をし、死の3時間ほど前に、主イエス・キリストを受け入れた人のことを思い出します。イエス・キリストと共に、十字架にかけられていた2人の犯罪人の内の一人です。彼は、死を直前にして、主イエス・キリストを信じました。

「イエスさま。あなたが御国の位にお着きになるとときには、私を思い出してください。」

イエス・キリストは、彼に言われました。

「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、わたしとともに、パラダイスにいます。」

たとえ、死の直前でも、神の前に悔い改め、主イエス・キリストを救い主として信じる者は、イエス・キリストのあがないの血で聖められ、神の前に義とされるのです。

あなたは、きょう、わたしとともに、〈パラダイス〉にいるのですよ。——といって下さったのです。

多くの信仰の先駆者たち、アベルも、エノクも、ノアも、アブラハムも、モーセも、ダビデも、ルター、カルビン、高山右近、細川ガラシア、マザー・テレサ・・・今の世に至る人々まで、

すべての信仰者が、地上では旅人であり、寄留者であることを告白しながら、〈天の故郷・天のふるさと〉にあこがれて歩んできました。

神は、彼らのために、都を用意しておられます。堅い基礎の上に建てられた都、その都を設計し、建設されたのは神です。

さて、そのような〈パラダイス〉は、どこにあるのでしょうか。

使徒パウロの、よく知っているひとりの人が、肉体のままであったか、肉体を離れてであったか、わかりませんが、「第三の天」にまで引き上げられました。そして、〈パラダイス〉に引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたのです。

「第三の天」にまで、ということですが、「第一の天」というのは、空気のある空間のこと。「第二の天」というのは、天体のある空間。そして、「第三の天」というのが、〈パラダイス〉のある所。私たちの知恵や知覚では認識できない、第四次元の世界だと思われま。

「もろもろの天」とか、「天と、もろもろの天の天」という言い方も、されています。

私たちは、[主の祈り]をする時、「天にいます私たちの父よ。」と祈ります。

ソロモン王は、「あなたのお住まいになる所、天にいまして、この祈りを聞いてください。」と祈りました。 “あなたのお住まいになる所、天”

「主は、その王座が天にある。」と、「詩篇」で、ダビデは歌いました。

これら、神が住まれ、その王座があるのは、もろもろの天の内、「第三の天」である、ということになります。そこがまさに、〈パラダイス・天の御国・天国・パライズ〉であるわけです。

イエス・キリストは、「最後の晩餐」の席で言われました。

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは、場所を備えに行くのです。

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをおらせるためです。」

天には、住まいがたくさんある。場所を備えに行く。わたしのいる所に、あなた方をおらせるためです。——とされています。

〈パラダイス〉のようすを、もう少し、くわしく見ていきましょう。

天に、一つの大きな、白い御座（みざ）があります。その御座の周りには、宝石の緑玉のように見える虹がかかっています。御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようになっています。

そして、その御座に、主なる神が着座しておられます。威厳のある主が、そこにおられます。

昼も夜も絶え間なく、主なる神をたたえる賛美の音が聞かれます。

「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな。神であられる主。万物の支配者。昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」

「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、なつめやしの枝を手に持って、御座と主イエス・キリストの前に立っています。

この中に、先に召されていった、皆さんの大事な人たちがいるのですが、イメージすることが出来るでしょうか。彼らは、こう叫んでいますよ。

「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。
アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」

衣が白いのは、主イエス・キリストの贖い（あがない）の血で洗って、白くしたのです。
白い衣を着て、イエス・キリストとともに歩みます。死に至るまで忠実であったしるしとして、「いのちの冠」を与えられます。
彼らは、神の御座の前において、聖所で、昼も夜も、神に仕えています。

大群衆が、主なる神を賛美します。とてつもない、おびただしい数のクリスチャンの賛美です。
「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は、王となられた。私たちは、喜び楽しみ、神をほめたたえよう。」

もはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを打つことはありません。なぜなら、御座の正面におられる、小羊なる主イエス・キリストが、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は、彼らの目の涙を、すっかりぬぐい取ってくださるのです。

そこに住む者は、だれも、「私は病気だ。」とは言いません。

「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにある、いのちの木の実を食べさせよう。」とおっしゃった「いのちの木」を見ることができます。

その他、杉の木、もみの木、すずかけの木など、「神の園にあるエデンのすべての木々」とありますから、あの「エデンの園」は、神のパラダイスに今も、あるのでしょう。

そこには多くの川があり、広々とした川があります。

預言者イザヤは言いました。

「私たちの祝祭の都を見よ。あなたの目は、安らかな住まいを見る。しかも、そこには威厳のある主が、私たちとともにおられる。まことに、主は私たちをさばく方、主は私たちの立法者、主は私たちの王。この方が、私たちを救われる。」

「主は、私たちをさばく方」 やがて、主イエス・キリストがもう一度こられ、再臨され、「最後の審判」の席に着かれます。

主は号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身、天から下って来られます。それから、キリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに、雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。

このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

人の子イエス・キリストが、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子イエス・キリストは、その栄光の位に着かれます。

私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ、悪であれ、各自、その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるのです。

すべての国々の民が、その御前に集められます。

イエス・キリストは、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分けます。

そうして王は、その右にいる者たちに言います。

「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」

彼らには、復活の、霊のからだを与えられ、「第二の死」を味わうことはありません。永遠のいのちにはいるのです。

それから、王なるイエス・キリストはまた、その左にいる者たちに言います。

「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された、ゲヘナの永遠の火に入れ。」

こうして、この人たちにも霊のからだを与えられ、生きたままで永遠の刑罰にはいります。「第二の死」です。

そして、世の終わりが来て、以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もありません。

私たちは、復活の体を与えられた、新しい天国の住民として、新しい天と新しい地に迎え入れられます。新天新地の〈パラダイス〉です。

私たちは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見ます。

「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかり、ぬぐい取ってくださる。

もはや、死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

「わたしイエス・キリストは、渇く者には、いのちの水の泉から、値なしに飲ませる。

勝利を得る者は、これらのものを相続する。

わたしは、彼の神となり、彼はわたしの子となる。」

都には、神の栄光があります。その輝きは、高価な宝石に似ており、透き通った碧玉（へきぎょく）のようです。

都には、大きな高い城壁と、12の門があります。その城壁は、碧玉で造られ、都は、混じりけのないガラスに似た純金で出来ています。

都の城壁の土台石は、あらゆる宝石で飾られています。碧玉、サファイヤ、玉髄、緑玉、赤縞めのう、赤めのう、貴かんらん石、緑柱石、黄玉（おうぎょく）、緑玉髄、青玉、紫水晶です。

12の門は、どの門も、それぞれ一つの真珠でできています。

都の大通りは、透き通ったガラスのような純金です。

都の中に、神殿はありません。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊イエス・キリストとが、都の神殿だからです。

都には、これを照らす太陽も月もありません。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊イエス・キリストが都のあかりだからです。

諸国の民が、都の光によって歩みます。都の門は一日中、決して閉じることがありません。そこには、夜がないからです。

水晶のように光る、いのちの水の川を見ることができます。

それは、神と小羊イエス・キリストとの御座から出て、都の大通りの中央を流れています。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができます。

また、その木の葉は、諸国の民・天国の住民をいやします。

もはや、のろわれるものは何もありません。

神と小羊イエス・キリストとの御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見ます。彼らの額には、神の名がついています。

もはや、夜がありません。神である主が、彼らを照らされるので、彼らには、ともしびの光も太陽の光も、いりません。

彼らは、永遠の王であるのです。

主イエス・キリストの御顔は、天国の光であり、イエス・キリストのご臨在は、天国の喜びであり、イエス・キリストの御名は、天国の歌であり、イエス・キリストの賛美は、天国の音楽であり、イエス・キリストのみわざは、天国の主題であり、イエス・キリストに仕えることは、天国での仕事であり、イエス・キリストご自身は、天国に満ち満ちておられます。

主イエス・キリストの王国は、永遠にわたる王国。

主イエス・キリストの統治は、代々（よよ）限りなく続きます。

このような、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を、私たちが受け継ぐように、主イエス・キリストは、してくださいました。これは、私たちのために、今も、天にたくわえられているのです。終わりの時に現わされるように、用意されているのです。

「終わりの時」といいますのは、一つは、私たちの肉体の生命が取り去られる時、もう一つは、イエス・キリストが再臨され、「最後の審判」がなされ、今私たちが見ているこの天地に、終わりが来る時です。

私たちは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。

また、万民の審判者である神、全う（まっとう）された義人たちの霊、新しい契約の仲介者イエス・キリストに近づいているのです。

ちょっと待って下さい。いかにも、自分が見てきたかのように話をして・・・と言われるかもしれせん。確かに、今語ったことの中で、私が実際に見てきたということは、一つもありません。神のみことばである「聖書」を通して、啓示されていることばかりです。

しかし、もし、私が実際に見てきて、こうだったと言ったとしても、丁度、「ラザロと金持ち」の話の中で言われているように、もし、聖書の教えに耳を傾けないのなら、たとい私が見て来たと言ったとしても、聞き入れてはもらえないことでしょう。

天の御使いは言いました。

「これらのことばは信すべきものであり、真実なのです。たましいの神である主は、すぐに起こるべき事を、示されているのです。

自分の着物を洗って、いのちの木の实を食べる権利を与えられ、門を通過して、天の都・パラダイスにはいれるようになる者は、幸いです。」 アーメン

● 今、このメッセージ「天国と地獄」を読んでもらっている、すべての人が、一人ももれることなく、天の御国・天国・パラダイスに迎え入れられますように。

- ・「人間には、一度死ぬことと、死後にさばきを受けることが定まっている。
- ・「地はその口を開けて、彼らとその家族、またコラに属するすべての者と、すべての持ち物とをのみこんだ。彼らと、すべて彼らに属する者は、生きながら、よみ（ハデス）に下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは集会の中から滅びさった。
- ・「カペナウム、どうしておまえが、天に上げられることがありえよう。ハデスに落とされるのだ。
- ・「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、わたしとともに、パラダイスにいます。
- ・「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは、場所を備えに行くのです。
- ・「もはや、飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。なぜなら、御座の正面におられる小羊なる主イエス・キリストが、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。
- また神は、彼らの目の涙を、すっかりぬぐい取ってくださるのです。
- ・「わたしに向かって、「主よ、主よ」と言う者がみな、天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。
- ・「この方（主イエス・キリスト）以外には、だれによっても救いはありません。世界中で、この御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。
- ・「あなたは、あなたの神に会う備えをせよ。

見よ。山々を造り、風を造り出し、人にその思いが何であるかを告げ、暁と暗やみを造り、地の高い所を歩まれる方、その名は万軍の神・主。

・「わたし、イエスは、御使いを遣わして、これらのことを、あなたがたにあかしした。わたしは、ダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。しかり、わたしはすぐに来る。

アーメン。主イエスよ、来てください。

〈祈り〉

主なる神さま。私たちの、愛する、大切な、家族・きょうだい・親戚・友人・知人の全員が、〈天国〉に迎え入れられますように。そのために、しなければならないことのために、一人一人、備えをなすものとなさせてください。全員、〈天国〉に行けますように。

主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。 アーメン